

迎春

旧年中は、大変お世話になりました。スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

未曾有の大震災と福島原発事故に見舞われた2011年。幾多の苦難を乗り越えて、新しい日本の発展に微力ながら貢献していきたいと新たな決意で新年を迎えました。

これまでに劣らぬご指導・ご鞭撻をお願いいたします。

2012年元旦

e-ウォッチ

トヨタの苦悩と野田内閣の処方箋

未曾有の大震災と福島原発の深刻な事故、長期にわたるタイの大洪水被害、ヨーロッパの金融不安などで大揺れに揺れた2011年の日本経済。いったい新しい年2012年はどうなるのか、何としても明るい年にしたいものです。

【ドラえもと「ハチロク」】

日本のリーディング産業であり、そのリーディング・カンパニーとして君臨するトヨタが、昨年11月から興味深いCMを放映しています。

フランスの有名俳優ジャン・レノ扮するドラえもんが、「車出して」とせがむ30歳ののび太(妻夫木聡)に「ダメ、だって免許持っていないじゃん」。そして最後に「免許を、とろう」のキャッチ・コピー。トヨタは年末の東京モーターショーでもかつて80年代に若者たちに親しまれたスポーツカーの愛称「ハチロク」をそのまま採用して、新しい小型スポーツカーを発表しています。若者の車離れを食い止めようという「Fun To Drive, Again」戦略です。

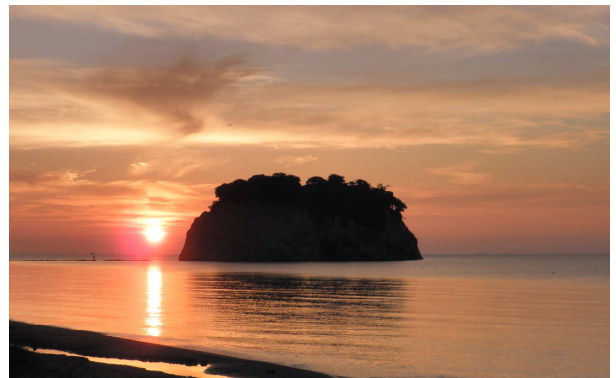
【業界トップとしての危機感】

若者をターゲットにしたトヨタの戦略は、ある意味ではオーソドックスで正攻法な戦略といえます。少子高齢化が進む日本では、人口そのものが減少するとともに、若年層が急速に減っています。そしてその若者たちの間で顕著な車離れが進んでいるといわれているわけですから、自動車業界の危機感は深刻です。それは日本経済全体の危機感でもあります。

これに対してトヨタは、業界のトップメーカーらしく、正面からパイ(市場規模)の拡大を図る戦略に打って出た、これが「Fun To Drive, Again」戦略です。日産やホンダなら、業界内部でシェア拡大やニッチ分野の開拓という戦略を採用する手もあるのですが、業界全体の浮沈を担うトヨタには、パイ拡大の課題に立ち向かうしか道はありません。ここにトヨタの危機感と悲壮感がにじみ出ているといえるでしょう。

【「いつかはクラウン」を夢見れない時代】

が、問題はここ先です。なぜ若年層の車離れが進んだの



見附島(通称・軍艦島)を黒く染め上げ波もない日本海から昇る朝日(昨年8月、石川・能登半島)。今頃は、荒波と風雪の中で、じっと春の訪れを待っていることだろう。

か、そして車離れが進む若年層にどうアプローチするのか、トヨタは果たしてこの問題に明確な回答を見出したのでしょうか。小型スポーツカー「ハチロク」を発表し、若者に「免許を、とろう」と呼びかけるCMを見る限り、その気配はありません。

かつて借金をしても車を持つことにあこがれた若者たちを支えたのは、「いまは大変でも、まじめに働き努力すればいずれは…」という成長を続ける社会への安心感であり、それに根差した人生観でした。しかし今は、将来を展望できない不安定な非正規雇用と、社会から自分の価値を認められないというやるせなさの蔓延です。そして若者たちの財布から毎月かなりの額を費消させた車のローンに代わって、携帯電話や課金制のオンラインゲームの利用料がその座を占めています。「いつかはクラウン」を夢見れなくなった若者たちに「免許を、とろう」の呼びかけは、むなしく響くばかりです。

【「母なる海」を活力ある豊饒な海に】

昨年末、苦悩するトヨタを援護するために、野田政権は自動車重量税の軽減やエコカー減税の継続などを打ち出しました。経団連など財界は、それでもまだ不十分と、取得税や重量税の全廃を要求しています。

しかし、これで車が売れ、日本経済は持ち直すのでしょうか。野田内閣が自動車減税と抱き合わせて狙う消費税増税は、冷え込んでいる消費マインドをさらに打ちのめし、若年層をはじめとする低所得者層から車を購入する機会をますます奪うことにはならないでしょうか。

アメリカ主導のグローバリズムに追随し、国際競争に勝ち残るために巨大な富を蓄積したトヨタをはじめとする日本の大企業は、同時に日本社会に大量の貧困層を生み出したのです。富の偏在と格差社会の進行です。しかし、この層こそ、かつて自らを育ててくれた母なる海であったはずです。

トヨタの頭上に揺れるダモクレスの剣は、日本経済そのものの置かれた状況でもあります。脱出する道は、母なる海＝国民に活力を与え、豊饒な海にすることです。税が持つ「富の再分配」という機能を發揮して。

再び運転を楽しめる時代になるか。新しい年が始まりました。

経営課題を見定めて——経営者に聞く

絆をつなぐ民族芸能の力を確信

民族歌舞団荒馬座 代表 狩野猛



◆劇団の活動と特徴をお聞かせ下さい

荒馬座は、日本の各地で伝承されている民族芸能を基にして、舞台用に再構成した作品を独自に創り、その作品での公演を中心に活動しています。例えば、2月からスタートする45周年記念公演の演目の中に、岐阜県恵那市の「中山太鼓」があります。今年10月に開かれた中山神社大祭の際には現地を訪問し、中山太鼓保存会の方々から直接指導を受けてきました。この演目では、大勢の叩き手が参加することから、45周年実行委員の方々も指導を受けるため団体でおしかけて一緒に教わってきました。その他の演目も、地元で伝承されている伝統芸能を現地の方から教わり、荒馬座として舞台用に再構成したものがほとんどです。

また、公演の運営については、企画から実行までの全てを荒馬座がプロデュースするものもありますが、大半は過去に荒馬座で太鼓の研修に参加したことがあるなど、座と関係ある方々を中心とした実行委員会の形式で行われるのが特徴です。実行委員会では、チケット売りや当日の役割分担などの運営面はもとより太鼓の練習まで行うこともあります。そして何より実行委員の方々の交流の場となり、仕事のことから家庭の事まで話題になることもしばしばです。45周年公演のスローガンも「未来は祭りの輪の中に」と掲げているように、公演の企画運営を通じて、参画する人が一人でも増え絆が深まればと願いながら運営しています。

また、劇場等を使用する一般公演だけでなく、小学校や中学校、保育園などでの「鑑賞教室」や「体験教室」、団体



中山太鼓（岐阜県恵那市串原）：45周年記念公演で演じられる

や企業の周年行事や各種イベントでの披露などさまざま場所へ出向いても演じています。ただし、学校が週休2日制になってからは、まとまって授業時間が確保できないためか、実施できる学校は少なくなっていました。子供たちが日本の民族芸能と接する機会自体が減っているので大変残念なことです。

◆今年が、劇団創立45周年とお聞きしましたが、これまでの歴史をお聞かせ下さい。

座の創立は、1966年の9月です。その時、私自身はまだ、荒馬座には直接関わってはいませんでした。私は荒馬座の近くの会社に勤めていました。翌1967年、板橋区の労働組合連合で行っていた文化学校、今でいうカルチャースクールのようなもの

ですが、その中に太鼓を学ぶ企画があり、そこへ参加したことがきっかけで荒馬座と関わるようになりました。この芸術団体も、当時は情勢的に労働組合との関わりが強く、働く人たちが芸能で励ましながら共に成長していくといった性格が強かったようです。荒

馬座はその後、1975年にはある芸能団体からの誘いで、2カ月にも及ぶ「カナダ公演」も実施しました。その後、中国、ベトナム、ブラジル、パラグアイ等の海外公演も行いました。いずれも、現地の市民の方々との交流が大きな刺激と勉強になっています。

1986年には板橋に今の本部となる民族芸能センターが完成、1992年には長野県八千穂村（現佐久穂町）に、2002年には埼玉県美里町にそれぞれセンターを完成させ発展してきました。



2008年3月、パラグアイ公園（於：日本人会館ホール）

＜民族歌舞団荒馬座＞ 本部：東京都板橋区、創立：1966年9月、座員数：25名・準座員数：約100名、事業内容：民族芸能の公演、保育園・小学校・中学校等での鑑賞教室、太鼓民舞教室の開催など



義援金と太鼓を持って被災地支援で訪れた岩手・釜石市。鶴住居青年会のみなさんが復興への願いを込めて虎舞を神社の前で奉納。(昨年9

◆東日本大震災の支援活動もされたとお聞きしましたが、どのような活動をされたのですか。

今回の震災では、荒馬座が長年交流してきた東北の郷土芸能団体も大変大きな被害を受けました。ある団体から連絡が入り「大人のものは手に入るが、子供用の服や靴が手に入らない」と連絡があり、いろいろな所へ呼びかけて物資を集めワゴン車で集まった物資を、道路がようやく開通した4月初めに届けに行きました。そこから始まり、特に親交のあった、岩手県の芸能3団体『中野七頭舞保存会(岩泉町)、鶴住居(虎舞)青年会(釜石市)、浦浜念仏剣舞保存会(大船渡市)』に特化して支援の活動を行いました。募金活動の方法については、座の後援会に呼びかけたりチャリティ公演も実施しました。地元板橋区では南蔵院というお寺に協力していただき境内でも実施しました。さくらの花も満開で、大勢の方々から義援金をいただくことができました。その後、数か所でチャリティ公演を開催できました。義援金は、数回に分けて被災地に直接届けることができました。今回は多くの方々に協力していたことを大変感謝しています。

◆「元気の源の民族芸能」

東京では震災後しばらくイベントなどの自粛ムードが続いていました。そんな時、被災地で

は「こんなときだから祭りを絶やさなくてくれ」と道具や衣装が満足に整っていない状態でも、なんとか祭りを実施する所が出てきました。これが、人や地域を作り上げる民族芸能だと感じました。物資の復興はお金があれば何とかできます。だけど祭りは、それだけではできません。人がやる気にならないとできないのです。一人でもできない。演じる人がいて、参加する人がいる。お年寄りもいて子供もいる。コミュニティがないと祭りにならない。そして祭りをやるとみんな元気が出てくる。民族芸能は、自然災害を幾度も乗り越えてきた歴史をもっています。だからこそ強いのだと思います。

◆今後の方針をお聞かせ下さい。

今年は、座の創立45周年記念公演の活動もあるので、公演活動に座の力を集中していこうと思います。また、景気もまだまだ回復しているとは言えませんので、しばらくは新たなことに数多く手を出すことは控え、原点に立ち返って活動をしていくことが大切なのだと考えます。

荒馬座創立45周年記念公演日程

『未来は祭の輪の中に』

① 2/11 (土/休) 埼玉会館	15:00～
② 2/12 (日) 川越市市民会館	16:00～
③ 2/18 (土) 太田市新田文化会館エアリスホール	15:00～
④ 2/19 (日) 熊谷文化創造館さくらめいと	16:00～
⑤ 6/2 (土) みかぼみらい館(群馬県藤岡市)	16:00～
⑥ 6/9 (土) パルテノン多摩	18:30～
⑦ 6/10 (日) 練馬文化センター	16:00～
⑧ 6/23 (土) 板橋区立文化会館	18:00～
⑨ 6/24 (日) 所沢市民文化センターミューズ	16:00～
⑩ 6/30 (土) シアター1010(足立区)	13:00～
	18:30～
⑪ 7/1 (日) 本庄市民文化会館	16:00～
⑫ 9/22 (土) 船橋市民文化ホール	17:00～

※お問い合わせは03(3962)5942 荒馬座まで

【車水馬龍】

◆町のざわめきがきこえてくるような言葉です。ここ幾年かは威勢のいい言葉が聞かれることは、まれでした。せめて新しい年の初めは言葉だけでも味わって見ませんか？◆車は車でももっとアナログなもの、だって馬が行きかう往来ですから。馬が龍のように連なるのですから、馬上の人の運転技術もけっこう試されます。馬は大きいですが、馬の宿屋も必要でしたね。往来の掃除もなかなか人手がいります。車も贅をつくしたのから、庶民の使い勝手のいいものから、そこは職人工人の腕の見せ所です。◆この言葉は、たぶん中国の長い歴史のどこかの時代に生まれたのでしょうか。時間の流れの中に戦さがあったり、天災に見舞われたり、何度もうくりかえされたことでしょうか。人や馬が途絶えた往来も、時代の中にはあったにちがいありません。何があっても時は過ぎ、人はそうして暮らしています。暮らしが続くところに往来の賑わいも生まれます。馬が龍のように駆けて、そこに商売の話がとびかい、けんか腰のやりとりがあつて笑顔もあつて、それが車水馬龍です。◆新しい年、人はどんな時代でも「あけましておめでとう」と言い正月を祝ってきたのです。

…(来)

へしやすいばりよう(車は流れる水のようにとめどなく、馬は龍のように連なっている様子から、車馬の往来の賑やかなさま。非常に賑わっているさま。

田植えから稲刈り・脱穀まで

はじめてコメ作りに挑戦しました

◆北八ヶ岳・千曲川のほとりで

昨年5月認証・設立したNPO法人「八千穂お山の家」。その後4回にわたる「お山の学校」で、コメ作りに挑戦しました。場所は長野県佐久穂町の千曲川のほとりにある田んぼです。行政の協力を得て、地元農家の方々の力をお借りして田植えから稲刈り・脱穀までを手作業が基本です。

◆のべ70名を越える参加

「グリーン・ツーリズムの実践と推進」を掲げ、始まった取り組みですが、この「お山の学校」にも大人から幼児まで、のべ70名を越える参加がありました。多くがコメ作り初体験です。

◆約180kgの収穫、みんなで新米を味わう

お借りしたのはわずかな田んぼですが、それでも約180kgの収穫があり、「佐久穂稀」と命名され、みんなで分け合って新米の味を楽しみました。

◆地元の方々との交流から地域振興への貢献へ

コメ作りなどを通して、地元の方々との交流も始まりました。農作業のあとでいっしょに夕食をつくり、飲み、語り合う。今後さらに、地域振興への貢献に発展させたいと設立2年目の年が始まりました。



「佐久穂稀」と命名されたコメ袋のステッカー(上)
農作業後、お酒を飲みながら懇親会(下)



二人から聞き取りをする中でわかったのは、彼らが非常に勤勉に働き、派遣先から望まれて働き続けてきたことだった。仕事の内容も働き方も正社員との違いなどない。トラックの製造ラインで、正社員と同じ作業服を着て、正社員と一緒に数々の部品を組み付ける仕事をしてきた。傍から見ると、誰が正社員で誰が派遣社員かなど全くわからな

い。大きく違うのは受取る給与が正社員より圧倒的に低いというところ。裁判の中では、こうした実態や、被告らの派遣法違反の数々を尋問等を通じて明らかにすることができたと思う。その結果、この種の事件では高水準といわれる内容で、昨年夏に和解が成立した。提訴から2年が過ぎていた。

でもやっぱりくやしい。二人は職場復帰はできなかった。勤勉に働いた二人の青年が、正社員を解雇するよりもずっと簡単な方法で職場を追われてしまった。2年越しの裁判をして違法な実態を明らかにしても、社員にはなれなかった。派遣法違反があっても、派遣法は労働者保護の法律ではないから...と裁判所は考えているようだ。

二人の青年は、「(支援者や組合の人など)みなさんに出会えたのが何よりの宝」「解決できて本当に嬉しい」と言ってくれた。でも、真面目に働いた派遣社員が理不尽に職場を追われる現状はほとんど変わっていない。今年は継続審議となっている派遣法改正がどうなるのか、是非注目していただきたい。

ちなみに、私はこの事件で弁護士になって初めての反対尋問を担当した。当時生後9ヶ月ながら、私の尋問練習に付き合ってくれた娘に感謝。今年もこんな母をよろしく願います。

大久保佐和子の
ママさん弁護士

奮闘記
第4回